

補足スライド

『4. 市場社会のイメージ』の
「市場社会とは？(2)」への補足

市場社会のグローバル性

労働の概念の実現

目次

1. 市場社会における交換の必然性
2. 市場社会でのグローバル化の実現
3. このグローバル化の形式性

1. 交換の必然性

生産関係と交換関係

何故にみんな、交換をやめることができないの？

∵商品生産関係が成立しているから。

=社会的分業の中で

私的労働と社会的労働とが分離しているから。

つまり、

商品を生産する労働は、

直接的には私的労働であって、

ただ間接的にのみ、

(すなわち市場で商品が売れて初めて)、

社会的労働として、

(すなわち社会的分業の一環として)、

実現されるから。

生産関係と交換関係

- 交換関係は生産関係の――
 - 結果であり、
 - 一部である。
- そもそも商品を生産しているから、その結果として商品交換する。

生産者側

- 前近代的共同体においては、補完的市場で、生産者はたまたま余ったものだけを販売するというのが基本だった。
- 現代市場社会においては、生産者は(単に余ったものを売りに出すのではなく)、社会的分業の中ですべての富をもともと市場向けに生産している。

消費者側

- 生産の帰結が消費である。——
- 前近代的共同体においては、補完的市場で、消費者はたまたま足りないものだけを購買するというのが基本だった。
- 現代市場社会においては、消費者は（たまたま足りないものを買うのではなく）、ほぼすべての消費手段を市場から購買する。

2. グローバル化の実現

地球を覆う網の目

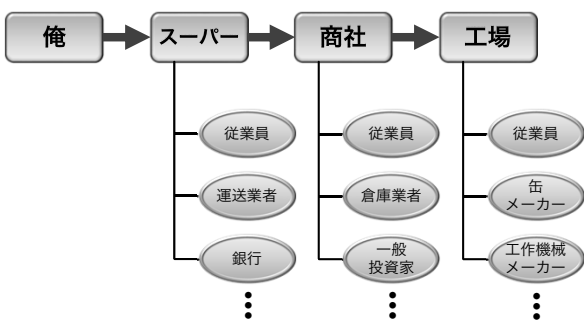
市場社会のグローバル性

- 地縁・血縁に関わりないグローバルな社会関係を、実現する。——
1. 労働過程から分離された交換過程で
 2. たった二者の交換関係の連鎖という形で
 - 単なる私利私欲の追求が結果的に共同利益を実現している。
 - 単なる二者の関係が結果的にグローバルな社会を実現している。

グローバル化の条件充足

- たがいに疎遠でバラバラな私的個人が交換過程で一方的に自分だけの私利私欲を追求したからこそ、結果的にグローバルな社会が実現された。

ナタデココを買うと…



使用価値の現実化で考えると

- 自然から生まれて自然に還るというナタデココの運動からすると、
- ナタデココを周りの自然から手に入れて（＝生産）、周りの自然に帰していく（＝消費）という、人類の物質代謝の運動から
- もちろん、別に私が食べなくても
- しかし、このナタデココは、私が食べたからこそ、

価値の実現で考えると

- もちろん、私が金を払ってから、その後でその金がナタデココの生産者に渡るわけではない。
- しかし、私が金を払ったからこそ、このナタデココの缶詰めの生産に必要な私的労働は社会的分業の一環として実現された。
- 私でなくてもいいがとにかく誰かが買わないことには、ナタデココ生産は業として成り立たない。

3. グローバル化の形式性

労働と交換との分離

グローバル化の形式性(1)

- 私的所有者同士の、分散された、互いに疎遠な関係という市場の原理から見ると――、
 - 自覚的な社会形成（つまり交換）をなしているのは、ただ二者の関係だけである。
- ↑ つまり
- 二者以上の関係は自覚的な社会形成から排除されている。

グローバル化の形式性(2)

- 部分としてのこの個別的交換において、自覚的に社会を形成しているという意識を当事者は持たない。
 - この自覚的な社会形成そのものの原理は無自覚性である。
- 全体としての市場社会そのものもまた自覚的に形成されたものではなく、個別的交換の寄せ集め、結果にすぎない。

グローバル化の形式性(3)

- 市場社会全体を実現しているのは社会的分業＝社会的労働である。
- ⇕ しかし
- 個人が行っているのは全体（＝社会的総労働）から切り離された一部分（＝交換）に過ぎない。

グローバル化の形式性(4)

- 市場社会全体で実現されているのは共同利益である。
- ⇕ しかし
- 個人が追求するのは、つまり個人の動機は、私利私欲のみである。
 - 交換という結果においては、そもそも労働において利益の共同性があつたということさえ消えうせている。